

歡喜の人生

丸山敏雄 著
目次

今日は最良の一日、今は無二の好機……………8

気づいたらすぐ……………8 人生に無駄はない……………12

気づいた時が絶好のチャンス……………18

目前の仕事から片づける……………16

新しい見かたを考えかた……………21

表と裏……………21

病床……………25

悪口……………27

ごうもん……………31

痛くない……………34

得るは捨つるにあり……………37

危機……………37

車座……………39

捨て身……………41

強欲の荷物……………43

取れぬものは取らぬ……………45

晴耕雨読……………47

難破して……………49

わが物はない……………50

わが身を投げだす……………51

「うそ」から「まこと」へ……………53

正直者のたね……………53

長者窮子の例……………55

うそばかりの生活……………57

その時その場の心境……………60

天与の研究資料……………62

号泣・慟哭……………65

親のまことの愛情……………68

純情の交流……………71

家庭倫理の主軸……………73

スナオな生活……………75

羊のように……………75

スナオの陰極……………77

スナオの陽極……………82

第一步……………84

きめごと……………87

天地にも法則がある……………87 法則に逆らうバカ……………89

社会にも法則がある……………90

社会的な約束……………92

だいそれた心……………94

喜んで守ろう……………95

破約の返礼……………97

自分自身との約束……………99

さかだちの人生……………100

わからぬ事はわからぬ……………100

目の前の苦しみはどうにもできぬ……………102

肉体の捕虜……………104

着物の捕虜……………107

目を開け……………108

悪人がなかつたら……………110

欲があつて困る……112
病気の無い世の中が……114
ぬすみだけは例外か……116
物はこんなもの……118
相手が悪い……120
美しい絵巻……121

新生活は家庭より……124

家の中心とは何か……124
尊卑と順序とは違う……126
家を貫くたての流れ……128
道義の中心は家庭にある……131
民主道德の建設を……132

耳の世界……135

耳の世界……135
耳の趣味……137
空前の大出版……142
塙検校の墓……144
耳の観景……150
耳の文学……145
俳聖・芭蕉……148

文化について……153

人間らしい生活……153
日本文化のあり方は……155
一人一人の進歩と反省……158

何よりも平和……160

信念ある文化生活……161

人類の黎明……165

三十人より三千人に……165
輝く顔……166
実践が実験……171
たくわんを食べぬ……173
倫理の曙光……169
「葉」の文字……177
みかんの村……179
父と子……175
まさに黎明……180

これからの教育……183

敗戦の原因……183
人間教育……184
家は至高の教育の場……187
たった一人でよい……186

和の倫理の展開……191

倫理運動の展開……191
「和」の解説……192
実生活に現われた「和」の諸相……194
自然と芸術……198
信仰にみる和の倫理……200
時間を超える和の具現……202
和を實にすること……204
和の展開……207

易・不易の倫理について…… 208

はじめのことば…… 208 「易・不易」とは…… 211 働・不働、流・不流…… 212

植物の易・不易…… 213 動物の易・不易…… 214 国土の易・不易…… 215

人間と家の不易…… 216 祖先の功罪…… 218 人類生活の易・不易…… 220

民族の不易…… 222 易・不易の実践倫理…… 224

不易の行事…… 226 社会生活の実際…… 227 働きは不易の倫理…… 231

日本文化の最高峰は…… 233

歓喜の人生…… 235

目の開いた少女の悲しみ…… 235 人類ははたして幸福になったか…… 236

自由平等はいかにすれば得られるか…… 239 健康はいかにすれば得られるか…… 240

動物の世界を観察すれば…… 241 人間世界になぜ苦悩ありや…… 244

ここに新生活倫理あり…… 246 新生活倫理の特色…… 247

倫理と宗教…… 248 新生活倫理と思想運動…… 252

新生活倫理と旧道徳…… 254 科学と新生活倫理…… 257

いかにしてわかるか…… 258 新生活倫理運動…… 260

修養や錬成ではない…… 261 世の方向を一変する…… 263

本書について

今日は最良の一日、今は無二の好機

——今日という日は二度と来ない——

気づいたらすぐ

今日しなければ、再びする日はない。今日は最良の一日である。今日をとりがす人は、一生をとりがす人である、永遠をにがしてしまいう人である。

私は小さい頃、母から、何度となくこのような物語を聞かされた。草深い田舎の農家に育って、学問もない母の生活規範は、ただ仏法であつたので、話も仏教に關したことが多かった。親鸞聖人のお父様・日野有範卿は、源三位頼政に味方して宇治にやぶれ、一家の方々を身をひそめねばならぬ事となつた。伯父・範綱卿にあずけられ、松若丸は、その翌年、かねて帰依の知識、青蓮院の慈円和尚の庵室にお弟子入り

を願つた。和尚はおごそかに言われた、「我が天台の入門は、俗体で九年の勉強をした後、官の許しを受けてでなくてはかなわぬことじゃ」と。おそれもせぬ松若丸は、「お硯を拝借」と申し上げて、懐紙にさらさらとしたためて差し出した一首の和歌、

あすありと思ふ心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものは

にこりとうなずいた和尚は、官に人を走らせて手続きをとつて、その日、緑の黒髪は剃りおとされた。それは養和元年三月十五日、松若丸九歳の春であつた。

「時は再び来ない」——この生活倫理が、私の幼い耳に何度くりかえされたことであらう。

学校に入るため故郷を去つた翌年であつたが、何の本で、だれが書いたものであつたか、今日では更に記憶に残るところはないが、「ポストポーン」ということをいろいろな面から書いたもので、何でも「今日はだめだ、今日は都合が悪い」と、延ばされるだけ延ばすということである。これが、私の頭に植えつけられた倫理の裏を行くものであつた。その時、私はまた、だれかの唱えている「即刻主義」（何でもその場で

してしまふ、寸刻ものばさぬということ」という言葉に共鳴し、「時は金なり」とか「一寸の光陰軽んずべからず」とか、当時はやった古い金言に励まされて、競って努力したのが私の学生時代であった。修養団とか、自彊術じきやうじゆつとか、岡田式静坐法とか、いろいろなのが私の寄宿舎でも研究されて、勉強に一層の拍車をかけた。その日に関係のある勉強は、きつとその日にしてしまふ。日曜に遊び得ない者は平素勉強し得ない人間だ、「なまけ者の節句働せきぐまき」ということから、日曜日は山に登った。当時、学生の人気を中心であった、象のごとき巨軀を教室に運んで来られる為藤五郎先生に付いて写生に出かけた。『セルフ・ヘルプ』〔サミュエル・スマイルズ著〕を読んで興奮したのもこの頃であった。

私が、二十年の学業生活を終わって宗教的修行に専念した頃、恩師によって教えられたことは、「悟ると共に働かせよ」という事であった。気がついたら、すこしの猶予もせずに、すぐにしてしまえ、というのであった。

禅でできたえられ、神人一如の奥堂に入った恩師は、平々坦々洒々落々、幼童のごとき老翁であったが、気がつきながら捨てておくような事があると、割れ鐘をたたくよ

うな大声でどなりつけた。「手紙は即刻に書け、返事を明日に延ばすな。先方についてたら額にされるものと思うて、念入りに書け。書いたらすぐポストに入れておけ。手紙は手に持って行け、ポケットに入れるな、二日も三日も忘れるぞ」と教えた。

ある時、便所の開き戸が変になって、下の板をすってうまく動かなかった。そのまま一日すぎた。一日中に何度かずつ便所に通うので、それを知らぬ人はなかった。翌日の午後でもあったか、便所に行くよと見えた恩師が、「ちょっと来い」と言うので、手洗いの水でも切れたのかなと行ってみると、さあ大変である。「これを気づかぬ事はあるまい、ノコギリをもって来い」と自らゴシゴシ切って立付けを直してしまふや、「ここに坐れ」と便所の前に坐らされて、「頭を出せ」とゲンコでカツとなぐりつけられた。

そうした修行の頂点、私が一番力をそそいだことは、朝起きの練習であった。目が覚めたらその瞬間、さっと起きる。床をけって、さっと起き上がる。それから時計を見る。「時計を見て起きるようなことではいかぬ。早過ぎたらあらためてまた休め、目の覚めるといふ事は何か必要があつて覚めるものだ」と。こうして一分のすきもな

い、一秒の遷延もない実践の生活を続けた。こうして、宵であろうと夜半であろうと、目が覚めたら必ず起きるという事を続けて、とうとう、「人の目というものは必要な時に覚めるものだ、それで起きようとすればいつでも起きられるものだ、時計よりか人の目の方が正確だ……」という事をはっきりと悟得した。

しかし、朝起きただけではなかった。生活の一切がすべて、その時々片づけられていく。そして今日の事は必ず今日のうちにしてしまふ。これを続けていると、瞬間瞬間がごとく働きである。何もしない時がない。それで、その時以外に時がない。ただ瞬間に生きている、それで永遠に生きている。昨日もない、明日もない。いつも働いているので、はたらきでない時がない。食事も、入浴も、ねむりも、皆はたらきである。で、遊びがない。いや遊びもまた、はたらきである。人生は、働きである。はたらきそのものが、恵みであり、報酬である。

人生に無駄はない

こうしたことが、生活の全面にひしひしと響いてくることになった。そして、その瞬間、気がついた時、これがその仕事をしとげるに一ばんよい時、他のいかなる時よりもつごうの良い時、最良のコンディションにあることが、ありありとわかるようになってきた。

これは、私が目が覚めたらさっと起きるといふ、ひたむきの錬磨を続けている時であった。ふと目がさめた。起きて時計を見ると夜半の一時である。家の内外を回ってみると、二階の一方に雨もりがしている、裏の離れの戸が一枚はずれている。こうしたように、目ざめた時は必ず何事かある、と気がつきだしてきた。ある時は戸じまりを忘れていたとか、干物が忘れられていたとか、あやしげな者がうかがっていたとか。これは日中のことである。二階で来客と語っていたが、ふと気がついて門前に行ってみると、家人が素姓のわからぬ男と押し問答している。そこで私が出ねば問題が片づかぬ、といった場面であった。こうしたことから私は、「気がつくという事はそれをせよという、我境に一貫した一つの至上命令である……」と、思うようになった。そして何のためらいもなく、さっさとできるようになったように思う。何かしなければ